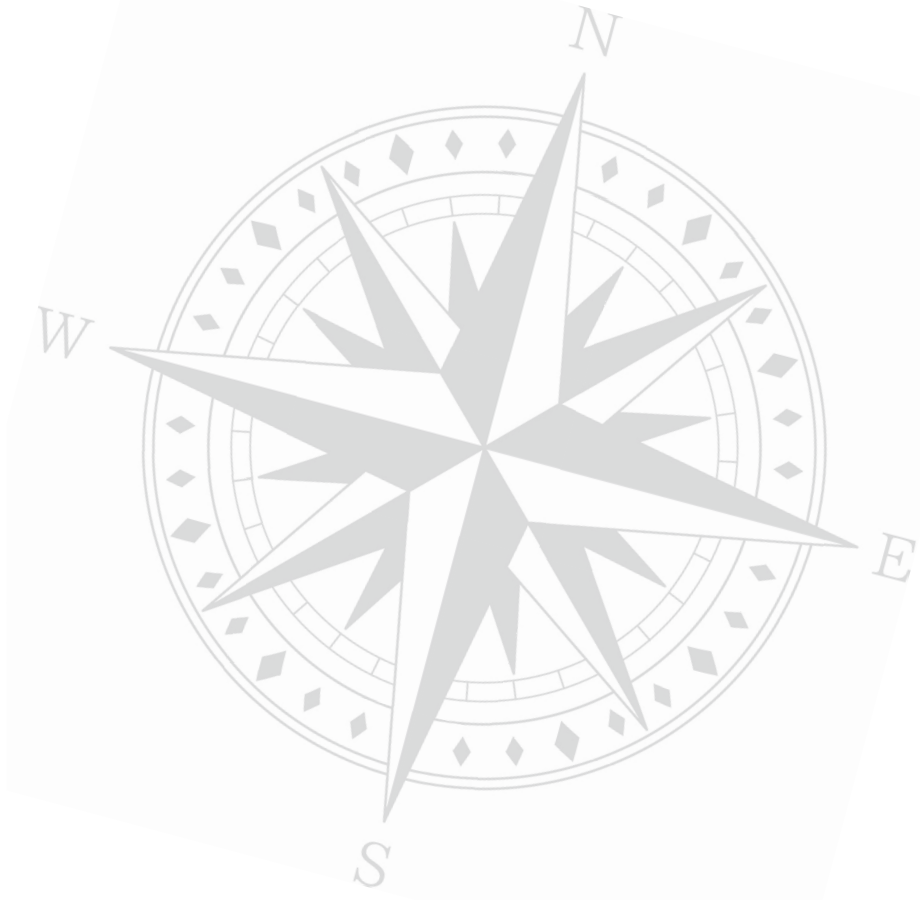


【プロの視点】

うねり取り 株式投資法

基本と実践

林 知之 著



まえがきにかえて

～「うねり取り」とはなにか？

あなただけの価値判断を確立する “投資の王道”

まずは結論ありき、「うねり取り」とはなにかを簡潔に示そう。

うねり取りとは、銘柄を限定し、数カ月単位の上げ下げを狙うトレード手法である。

短期の売買ではないし、ウォーレン・バフェット氏が行う“バイ・アンド・ホールド”の長期投資でもない。また、有望な銘柄を見つけて入れかえていく“選別投資”とも異なる。トレードを職業と捉え、狭い範囲だけを見てトレンドを読み、自らの基準でポジション操作を行いながら、株価変動の波を“泳ぐ”技術である。

とても説明が難しく、個人的な感覚が中心の売買スタイルだ。個人の感性を基にポジションゼロの時期をつくりながら、上げ下げどちらも取りにいく——普遍性がある半面、自由度が高いから基準を決めにくい。その不安定な部分を支えるのが、株式市場との“距離”、つまり、株価変動を俯瞰する姿勢である。

次ページに示す値動きを見てほしい。最も人気のあるローソク足による、個別銘柄の日足だ。これを見て、ローソク足が生み出す多くの情報を基に未来を考えることは、とても魅力的で面白い。だが、売買の実践から遠ざかり、過去の株価を考えるだけの作業に傾くことを知っておくべきだ。

ローソク足

7014 名村造船所

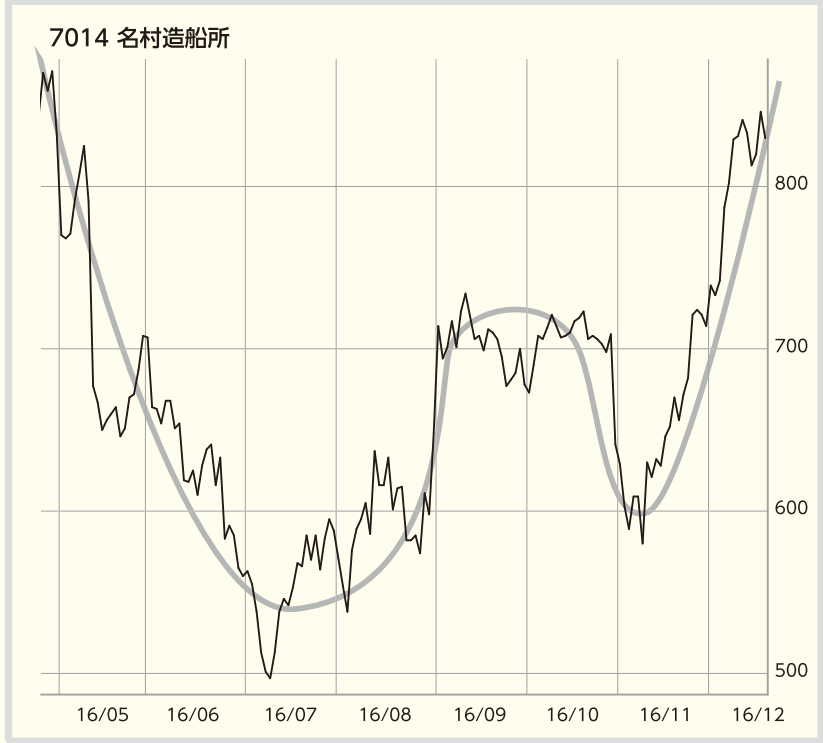


真の実践家は、毎日の膨大な情報に惑わされず自らの道を進むために、株式市場との適正な“距離”を保つ。

そのために、銘柄を限定するだけでなく、情報量の多いローソク足を避けたり、マニア好みの複雑なケイ線論を否定してシンプルな観察に努める。

上に示したローソク足を、終値だけの折れ線チャートにしてみよう(次ページ)。

折れ線チャート



重要と思える情報を思い切って捨て去ることで、シンプルかつ実践的なイメージになる。さらには、折れ線チャートに描き加えたような、大ざっぱな「トレンド」を強く意識する。

そして、「相場は上がる」と確信すれば買い、「下がる」と判断できればカラ売りを仕掛ける。少しでも迷うようならば、サッと手を引いてしまう。誰の意見にも左右されず、自らのカネを自らの思惑通りに動かしていく、自立した姿勢が生まれるのである。

これが、うねり取りだ。

本書の読み方

誰にも、明日の株価はわからない。だから、全員が正解にたどり着くことなど絶対にない。ほぼ同じ価値判断基準で値動きを観察しても、人によって答えは異なり、売りと買いが真逆になることさえある。

だから、よく耳にする「この銘柄はまだ上がるのでしょうか？」という質問は、愚の骨頂といえる。

うねり取りの考え方は、そんな誤った世界に進むことをズバリと否定してくれる。

そのかわり（と表現するのは的確ではないが）、「こうなったら買いましょう」といった“マニュアル”が作りにくい。うねり取りは確固たる「手法」だが、深く考えると「思想」「哲学」、あるいは「概念」のようなものともいえる。だから本書では、第1章と第2章にページを割き、根底の考え方をじっくりと伝えようとしている。

このことを踏まえ、第1章、第2章……と順番に読み進めるのもありだが、「まずは、うねり取りの実践」と考えて第3章から読むのも、ひとつの方法である。ただし、第1章と第2章が実践を支える大切な考え方、うねり取りの根幹についての解説なので、第3章から読み始めた場合でも、必ずあとで熟読してもらいたい。

中源線建玉法が存在

うねり取りは、前述したように、いわゆるマニュアルが作りにくい。実践者の裁量や感性に委ねなければならない部分が多いからだ。

絵を描く作業を考えてほしい。真っ白い紙を渡されて「好きなものを書いて」と言われても、ふだん描かない人は困ってしまう。しかし、塗り絵ならばなんとかなる。ここは何色にしようか……経験がないなりに考えながら、それなりに進めていくことができる。

十分な理解力と実行力、試行錯誤していく能力などがあれば、たとえ原則論だけでも、うねり取りを実践していくことができる。真っ白な紙と説明だけで、とりあえず絵を描くことができ、2枚目、3枚目と描き進むうちに上達していく。

しかし、塗り絵的なものがあれば、どんな人にも、うねり取りを体験してもらえる。プロの対応というものを、多くの人に手軽に体感してもらうことができる。

その役割を担ってくれるのが、本書の第5章と第6章で解説する、ちゅうげんせんたてぎょくほう中源線建玉法である。値動きが上向きか下向きかの判断、つまり強弱の判定と、それに基づいた3分割の売買がルール化されている具体的方法論だ。

コンピュータを駆使して安易に「儲かる数式探し」をしたようなシロモノではなく、「こういう場面は買いだよな」といった実践者の感性をシンプルな数式に落とし込んだものだ。

といって、予測の的中率を大幅に高めることなど不可能だから、押したり引いたりと対応しながら値動きの波を“泳いで”いく発想が求められる。単なる“当てもの”ではなくトレード手法に昇華させるためには、必然的に、分割売買によるポジション操作が加わる。

総合すると、中源線建玉法における個々の判定基準やポジション操作は、生身の人間が感覚的に納得できるものなのだ。

ルールはすべて公開してあるし、学習の教材も豊富にある。売り買いの指示が明確になるといっても、意味のわからない数式ではなく、「なるほど!」と感じながら頭に入れ、その理解を確認しながら、プロの思考をベースとしたトレードを実践できるのである。

うねり取りにも、多くの入り口が考えられる。中源線の利用は、そのひとつにすぎない。だが、バランスの整った、優秀な学習ツールであることは間違いない。

【参考図書】 いずれも林投資研究所オリジナル

『中源線建玉法』……中源線のバイブル。四部構成の基本の教科書。

『入門の入門 中源線投資法』……中源線の基本ルールを公開した実践書。

『DVD 中源線建玉法 基本コース』……ルール説明のセミナーを再現。

プロの思考を知ってほしい

100万円が1億円になる

ゼロから3億円をつくった

ハデな宣伝文句は、「ホントか?」と疑いながらも気になる。

「カンタンそうだ」と感じる部分があれば、サッと飛びつく。

だが、それほどカンタンに儲かるなら、誰も苦労はしない。といって、本業や余暇を犠牲にしてまで必死に勉強しなければ技術を手に入れられないかという、そうとも思わない。正しい考え方で適正な範囲を守れば、他人の助けなしに結果が期待できる。

だから、プロの思考をマネするべく、のぞき見てほしいのだ。

株価の上げ下げについて、多くの人は“理由”を知りたがる。そして、売買を実践しない記者が書く、まことしやかな解説に夢中になる。

だが、理由など説明できない上げ下げばかり存在するのが現実だ。その現実をまっすぐに見て、やり方だけを考える、理屈を知っていても行動できない人間の心理を考える、そして具体的な取り組み方を構築する——これが、プロのプロたるゆえんだ。

株式市場では、初心者からプロまでが同じ土俵で売り買いを行う。ここで重要なのは、直接的な“対決”がないように見えて、多数の参加者が利益を奪い合う構図があるということだ。

株式市場の観測者は、そのままプレーヤーだといえる。観測しながら売買を実践し、その行動によって市場の価格を動かしている立場だ。

天文学の分野ならば、天体の動きについて観測者全員が正解にたどり着くかもしれないが、株式市場では事情がちがう。常に、利益を上げる者と損をする者とに分かれるのである。

自信をもって“異端”でありたい

株価が動くたびに勝者と敗者が生まれるが、常に利益を上げるのは至難の業。だが、考え方や行動が少しズレているために、絵に描いたように負け続ける参加者がいる。

誰にも明日の株価さえわからないのだから、予測そのものは当たり外れたり……。だが、対処が悪いために、高いところを買い、ダメだと思いながら放置して安値で投げたしまい、少し上手に行動した参加者の利益を助けることになる。

こんな残念な行動パターンの対岸には、株式市場との距離を適正に保った賢い参加者がいる。多くの人が日々の動きを気にして、日経平均の水準や世界情勢に漂う不安材料をチェックしながら迷走している。その対岸で、数少ない個別銘柄を対象に、独自の相場観とポジション操作で損益という“結果”をうまくコントロールする参加者たちだ。

プロ相場師の4割が、うねり取りを実践しているといわれる。

うねり取りは、いわば“概念”だから、正確にはうねり取りに分類できない手法でありながら、うねり取りの核となる考え方を盛り込んだ独自の手法をもつプロも含めたら、かなりの数ではないか。

先行きを当てよう、有望な銘柄を見つけよう……「なにを買うか」に目が向くと、石を投げれば当たるような“銘柄情報”にたどり着く。勝つこともあるが、負けたときが大きい。

そんなドタバタ劇から離れ、「どこで買うか」「どこで売るか」をまっすぐに考えるのがプロの思考だ。ここが固まったところではじめて、「それに適した銘柄はなんだ？」と考える。

多数の投資家がハマっている“銘柄至上主義”を上手に利用するのが、最もウケる投資情報ビジネスだ。だから、プロの思考を懇切丁寧に説くことで、大多数の人を対象外にしてしまう。

たとえそうでも、「予測情報の販売」に重点を置く業界のあり方に一石を投じたかった。今後も、こだわりをもった異端であり続けたい。

2017年7月

林 知之

まえがきにかえて～「うねり取り」とはなにか？

第 1 章

投資情報の 8 割は有害 16

1-01	株式市場には夢がある	18
1-02	トレードとセックスは、他人の行為を見る機会がない	19
1-03	株価を押し上げるのは「人気」	21
1-04	材料の価値	23
1-05	材料がきっかけでトレンドが生まれる	25
1-06	株価の先見性	27
1-07	情報の多くは単なる断片だ	29
1-08	新聞の読み方	30
1-09	トレードに知識は不要	32
1-10	価格だけを見れば十分	34
1-11	「安く買う」「高く売る」は誤り	36
1-12	間違いだらけのナンピン論	38
1-13	カラ売りは危険なのか	39
1-14	強迫観念で行動するな	42
1-15	投資家は保護されていない	44
1-16	自分の答えを出す	46

第2章

相場技術論とトレードの準備..... 48

2-01 金融マーケットの真実と勝つための方法論..... 50

2-02 自滅しないために..... 52

2-03 思想と実践方法の整合性..... 55

2-04 相場技術論は非常にプレーン..... 57

2-05 テクニカル分析の三原則..... 59

2-06 価格だけを見る直接法..... 62

2-07 マーケットは自分の都合を聞いてくれない..... 68

2-08 予測とは何か..... 69

2-09 予測の的中率、勝率、そして利益率..... 71

2-10 「わからない」という答え..... 74

2-11 当てようとする気持ちも捨ててはいけない..... 75

2-12 トレードの三要素..... 76

2-13 トレードの分類..... 79

2-14 準備に時間をかけろ..... 83

2-15 シンプルで実用的な理論をもて..... 86

2-16 趣味的要素の排除..... 88

第3章

うねり取りを実践するための古典的手法 90

3-01	流行と古典	92
3-02	数カ月を基準にする	94
3-03	価格ではなく日柄が基準	96
3-04	季節的な変動がある	97
3-05	カレンダーで売り買いしても儲かる？	99
3-06	“専門バカ”で上げと下げの往復を取る	102
3-07	“事件”がないのが良い銘柄	104
3-08	条件は「地味な安定」	107
3-09	当てるのではなく流れについていく	108
3-10	生活費を稼ぐ職人の売買	110
3-11	道具は日足と場帳、そして玉帳	112
3-12	日足	113
3-13	場帳	116
3-14	日足と場帳の併用	118
3-15	玉帳	120
3-16	アナログ作業の効果	122
3-17	区切りをつけるという発想	123

第4章

うねり取り実践のポイント 126

4-01 上げ相場の難しさ 128

4-02 瞬発力の勝負 130

4-03 インプットとアウトプット 132

4-04 売りと買いで売買 134

4-05 分割が必須 136

4-06 練習の方法 138

4-07 試し玉と本玉 140

4-08 試し玉は売り買いが逆でもいい 141

4-09 シゴトとしての売買と経費の損 143

4-10 損切りは試し玉の段階で 145

4-11 利食いと損切り、どちらが難しい？ 146

4-12 手仕舞いは素早く 148

4-13 慣れることの有利さ 150

4-14 値動きを体感する 153

4-15 「プロは逆張り」ってホント？ 156

4-16 イメージは「順張り」でいい 158

4-17 究極は乗せ 159

4-18 ツナギ 161

4-19 ドテン 163

4-20 中源線建玉法は「うねり取り」だ！ 164

第5章

機械的判断でうねり取りを実現する「中源線建玉法」 168

5-01	株価の波を泳ぐ感覚	170
5-02	折れ線チャートを利用するワケ	172
5-03	「順行」「逆行」という発想	176
5-04	トレンド転換の基本概念	179
5-05	3分割で建玉をコントロールする	185
5-06	「順行」は放置、「逆行」に注意する	187
5-07	トレンド転換の補助ルール	188
5-08	「再転換」がポジション操作のキモ	189
5-09	キザミの設定で転換のタイミングは変わる	192
5-10	確固たる答えを示す	194
5-11	実際に中源線を引いてみる	196
5-12	基本は「普通転換」	198
5-13	「42分転換」と「再転換」に注意	200
5-14	中源線を「道具」として使いこなす	201

第6章

中源線の活用と運用上の注意..... 204

6-01 中源線はシステムトレードなのか（1）..... 206

6-02 中源線はシステムトレードなのか（2）..... 208

6-03 中源線研究の三本柱..... 211

6-04 シンプルな基準を貫く..... 213

6-05 中源線を身につける..... 215

6-06 分割による建玉操作（1） なぜ分割なのか？ 216

6-07 分割による建玉操作（2） なぜ3回なのか？ 218

6-08 ブラックボックスの罠..... 220

6-09 トレードの「守・破・離」..... 222

6-10 中源線の可能性..... 225

6-11 机上の計算と人間の盲点 226

6-12 高い勝率を求めない損小利大 229

6-13 ダマシは避けられない..... 231

6-14 資金管理を怠らない..... 233

6-15 「計算」に偏りすぎるな..... 236

6-16 中源線をアレンジする..... 240

第7章

トレードは常に自分が中心 242

7-01	日々是決断	244
7-02	「何を買うか」ではなく「いつ買うか」「どこで売るか」	246
7-03	事前の想定に必要な「いつ」	247
7-04	生き残りを第一に考える	249
7-05	計画はネガティブ思考、実行はポジティブ思考で	251
7-06	禁止事項は肯定形に置き換える	252
7-07	利己的な行動が正しい	255
7-08	個人投資家の武器を利用する	256
7-09	売るべし、買うべし、休むべし	259
7-10	個人投資家こそプロの視点をもつべき	260
7-11	経験とは何か	262
7-12	女性が優秀な理由	264
7-13	自分の立ち位置を決める	267
7-14	真逆を考える	268
7-15	予測は当たらない	270
7-16	企業分析は他人、値動き分析は自分の手で	272
7-17	確信ある自分流を	274
7-18	投資家としてのゴール設定	276

本書は2017年7月末の情報に基づいています。
また、投資の判断は自分自身の責任において行ってください。